

放射能被害に希望

食品と暮らしの安全基金 代表 小若順一



- 第Ⅰ部 日本の民間療法で「奇跡のよう」
- 第Ⅱ部 日本人を救う日本の土
ニコライ・ラーザレフ博士 講演録
- 第Ⅲ部 食品の放射能基準を崩壊させる事実
- 第Ⅳ部 放射線ガン死評価理論の終焉

NPO 法人 食品と暮らしの安全基金
(旧称：日本子孫基金)



はじめに

「生きるか、死ぬか、それを問題にする」のが、放射線の研究者です。
頭痛がすると生活に支障が出ますが、その程度の健康障害を医師は無視してきました。
ウクライナでは、信じられないほど多く健康障害が出ているのに、「放射線とは関係はない」と、研究者から町医者まで同じように言いました。

人体影響があるとされてきた被曝量の最低値は 100 ミリシーベルト。ところが、食事で 0.011 ミリシーベルトを加えると頭痛が出たことを、前回に少し報告しました。

その裏付となる事実が起きていたので、食品による人体影響は、これまで知られていた被曝量の 1 万分の 1 レベルに最低値が更新された、というのが今回の報告です。

今回の収穫は、信頼できる科学者に巡り合えたこと。

健康被害が多いウクライナ非汚染地域の土壌より、日本の関東地方の土壌は、放射性セシウムが数十倍から数百倍も多く検出されます。にもかかわらず、被害が少なそうなのは、日本の土が放射能を結合して離さないタイプだったからです。

この幸運に気づかせてくれたニコライ・ラーザレフ博士の講演録は、知りたくて、確認したかったことばかりです。

今回のトピックはもう一つあります。

足の悪い子を治してほしいと、現地から頼まれた難病の 8 歳の男児を少し良くしたことです。

血液循環療法協会の大杉幸毅会長に厚かましいお願いをして、協会の費用負担で派遣していただいた古田勝彦さんが、朝晩 3 日間治療して、現地の人から「奇跡のよう」と言われるほど良くできたことは、日本人として最高の誉れになりました。

2014 年 4 月 18 日

食品と暮らしの安全基金 代表 小若順一



第I部 日本の民間療法で「奇跡のよう」



3月16日



3月18日

ワジム・チモシェンコ

「歩くぞ！」と希望

引っ張り上げていないと歩けない8歳のワジム。

3日間で、少しバランスを取れば自分で歩けるようになり、「歩くぞ！」と希望をふくらませるようになりました。

依頼されたのは信頼の証

「森に住む足の悪い男の子を治療してもらえないかと、ピシャニツア村学校の校長から言われています。治療してもらえない？」

2013年11月、来日中のタチアナさんから、こう言われました。

肢体不自由児のような症状を治してくれと言われたのは、半年前に、奇跡のように良くなったミーシャを、目の前でタチアナさんが

見ていたから。それを聞いた校長が、私を信頼してくれたからです。

放射能汚染による被害なら、福島でも同様の被害者が出る可能性があります。だから、治そうと決断するしかなかったのですが、ミーシャを良くした夜、私の方がギックリ腰になって2日間寝込みました。

治療するには、体力がいります。普段、身体を使っていない編集者が、民間療法で治療するのは大変なので、回答を保留。

気にしながら新年に入り、「治してみるしかない」と決意。そして、まずは剣道着を注文。剣道をしなくなって30年以上になりますが、剣道着が届くと、やる気がわいてきました。

サムライが目の前に現れると、気のせいで、子どもが少しは良くなるかも、という狙いもあります。薬剤の効果を確かめるとき、「ブラシーボ」＝「気のせい」が影響しないように、計画が立てられます。しかし、医者が治せなかった症状を良くするので、少しでも効果がありそうなら、気のせいでも利用します。

「血液循環療法」で治療

「治療する」とウクライナへ連絡し、「すぐにキノコ、ベリー、川魚、ハチミツを食べるのをやめて、放射能の摂取量を少なくするように」伝えてもらいました。

被曝した子どもを治療するので、血管が弱い可能性があります。

私は、野口体操に13年間通いました。野口流のマッサージは、ゆすって体をゆるめ、骨をなでてコリを取るのですが、簡単に見えても、身体をゆるめるのは結構難しく、自分の腰に負担がかかります。

もう一つできるのは、19歳の時に講習を受けて免状をもらった護身術・八光流の皇法指圧ですが、とても痛いのです。それで、1度で押すのを3～6回に分けて、使い分けるように練習して、ミーシャを治療しました。

ミーシャは、症状のあまりのひどさに驚いて成り行きで治療したのですが、今度は時間があつたので、弱い刺激で血管を傷つけずに治療できる血液循環療法協会の大杉幸毅会長に弟子を1人ツアーに出して治療してもらえないか、と依頼。

経費は出さないという厚かましいお願いなのに、大杉先生は、かつて内弟子だった古田勝彦さんを出してくださいました。

「血液循環療法」の大杉先生の講習を受けると、「絶対に治そうと思ってやりなさい。自己流でいいです」と言われました。

レシチン・ミネラルで神経の傷を癒す

放射線による神経の傷は、ツボを刺激しても、すぐには修復できないはず。そこで、傷ついた神経組織を少しでも早く修復させようと、神経細胞や、神経線維を守っている鞘の主成分であるレシチンを、食事で大量補給す

血液循環療法

指でシコリを探して、痛いけれども気持ち良く感じる強さで押すのが、血液循環療法の特徴です。

痛いと感じた瞬間に、パッと離すので、痛みはほとんど感じません。

「押圧」を繰り返してシコリを取ると、身体がすぐ楽になります。

自分で、自分の身体を押せば、そのたびにシコリと痛さを確認できるので、自己治療には最適療法の一つです。

ただし、人を治療するには高い技量が必要で、古田さんはその高い技量を発揮して、ウクライナ各地で痛みを取り、子どもから、校長、村長までを魅了しました。

【血液循環療法協会と大杉治療院】連絡先：☎ 06-6848-2256 FAX 06-6848-2296
〒 560-0013 大阪府豊中市上野東 3-18-1-308

ることにしました。

レシチンを作るにはミネラルが必要なので、煮干し・焼きアゴ・昆布を粉末にしたダシの「調味粉」でミネラルを補給します。

まず、油に溶けるタイプのレシチンを手に入れ、エキストラバージン・オリーブ油と混ぜて、そこに酢を入れてドレッシングを作り、食事のときに使うことにしました。

市販のミルクチョコレートに、レシチンを10%と「調味粉」を入れたチョコを作り、これを現地に持ち込みました。



「どういう症状？」

16日夕方、家に子どもたちを迎えに行った車が到着し、8歳のワジムはお母さんに抱えられ、6歳の女の子マシャーはお父さんと共にホテルのレストランに入ってきました。

一緒に食事して、レシチン・ミネラル入りドレッシングをかけて食べさせましたが、ミーシャも2人の子も嫌がらずに食べました。

現地マッサージ師のアレクサンドラさんが合流したので、部屋で子どもにレシチンだしチョコレートを食べさせながら、症状を確かめました。



ウクライナのマッサージは、ツボやシコリの概念がなく、ポイントを見つけて指圧する発想がないので、古田さんが指圧を教え、私と意見交換しながら治療を進めることに。

3人とも全身が足先までかなりガチガチに固まっていたので、古田さんが全身のしこりを独特の指圧（血液循環療法では「押圧」とか「圧迫」と言いますが、報告書はわかりやすい「指圧」に統一）で取り除いていきます。

私とアレクサンドラは、足の親指を持って小さく振り続けました。疲れる仕事ですが、つっぱっているワジムの親指の方も疲れませす。親指が疲れ果てると、フッと緩むようになるので、さらに振り続けると、緩んだままになったので、親指を少し痛く指圧しました。

足の親指には、脳につながるツボが集中して存在するので、脳を刺激する作戦です。



古田さんが全身のしこりを取り除くと、お母さんがわきの下に入れて支えなくても、手を持つだけで少し歩けるようになりました。

足に力が入るツボが見つかる

17日の朝からは、現地マッサージ師のマリヤさんも合流。プロの2人や両親にも、足の親指を刺激してもらいました。



それから治療を交代した古田さんが、足をつぶる反射神経のツボを見つけたのです。



ここから複数のツボが見つかり、そこを軽く刺激し続けると、ワジムは、足に力が入るようになっていきました。

17日夜には、すっきり立てたので、歩きたくて仕方なくなり、喜んで何とかして歩こうとします。

「歩くぞ」「歩けるぞ」と叫ばせると、喜んで叫び、歩きます。彼が強く願ったことが、目の前で実現しかかっているのので、部屋中のみんなが幸せに包まれました。

18日夜には、ほんの少しバランスを取るだけで、何とか歩けるようになって、みんなか



ら大きな拍手をもらい、ワジムは、この夜もとてもうれしそうでした。

「これまでウクライナ各地の7カ所の病院で、各1000ドル（半年分の収入）をかけて治療しましたが、症状が良くなったことは一度もありません」と両親は言います。

19日の朝も治療し、私たちがバスで出発するとき、お母さんは泣いていました。

この翌日、タチアナさんに孫が生まれ、学校ではピンチヒッターでミーシャのおばあちゃんが講演し、次のように話したのです。

「私はすべて見ていましたが、オブルチの汚染地にまったく歩けない子がいました。その子が、本当に奇跡のように、かなり良くなって、本人もすごく喜んだのです」

キノコ、ベリー、蜂蜜を食べるか売るか

2歳までは普通だったのが、だんだん悪くなっていったワジム。ところが、次男には同じような病状が出ていません。

お母さんに「ワジムが産まれるまでは、キノコ、ベリー、蜂蜜をよく食べていましたか」と聞くと、「よく食べていました」。

「ワジムが病気になってからも食べていますか」と聞くと「ほとんど食べていません」。

実は、この地域の換金作物は、キノコ、ベリー、蜂蜜です。ワジムが病気になると、換金作物を食べるのをやめ、お金に換えて、病院へ行くのに使ったのです。

両親と次男は、キノコなどを食べられなくなったので、健康が守られました。

換金作物は、国内だけでなく、ドイツ、デンマーク、ポーランドにも売られるそうです。

森から出て学校の近くに住ませる

ワジムは、放射能の少ない食事でも悪い状態が続いているので、さらに良くなって歩けるようになるのか、自信はありません。

でも、被曝を減らすと歩けるようになったら、放射線傷害と、障害の回復の画期的な発見につながるので、手を打ってきました。

1. ワジムの家族を森から出して学校の近くへ引っ越させます。1700ドル（17万円）の家を校長が見つけたので、1500ドルを当方がもち、あとは校長が責任を持って、何とかします。家を買うと、庭と畑がついています。

2. 今後1年間、1週間に1度、マッサージを受ける料金として500ドル渡してきました。このようなことができるのも、多額のカンパを贈っていただいているお蔭で、私もみな様に感謝しております。

3. レシチンを1年分ほどプレゼント。

これでワジムは、神経細胞と、神経線維の鞘の傷の修復が早まると思います。

これでワジムは、神経細胞と、神経線維の鞘の傷の修復が早まると思います。

マシャー・ヴァジリチューク

かかと

踵をつけて 真っすぐ歩けた

日本でいう内またで、足首から先が内側に曲がり、歩くときに踵がつかない6歳の女の子マシャー。

足の付け根が痛くてよく泣いたので、お父さんが独学でカイロプラクティックのような治療をして、歩けるようにはしていました。

このマシャーも、校長から「少し足が悪いので」と治療を頼まれていました。

初日は身体をゆるめただけ。2日目に、全員で症状を確かめたあと、「一発で治せ！」

と古田さんに言うと、10分足らずで足首から先を真っすぐにしてみせ、歩かせると、踵をつけて歩きました。

念のために3日目にも来てもらおうと、少し元に戻っていたので、古田さんがすぐに治し、お父さんに、治す方法を教えました。



ミーシャ・シンカー

治るが戻る

1 度目の治療

7歳から身体が不自由になり始めた、当時10歳のミーシャに、2012年11月から食事改善プロジェクトに加わってもらいました。



2012年10月



2013年3月

2013年3月に訪ねると、良くなったと聞いていたのに、左腕はほとんど固まったまま。右腕は動くものの常に揺れて、震えもあり、足首は少し内側に曲がっていました。

指圧してみようと腕を持つと、腕は完全に固まり、鉄のように動かなくなります。

「調味粉」と、エキストラバージン・オリーブ油と酢を混ぜて4日間食べてもらって、5日後に指圧と野口体操のマッサージで再治療に挑むと、3年

ぶりに左腕が上がり、足はまっすぐになって、うまく歩けました。

悪くなっていたミーシャ

その後、調子はいいとのことだったので、今回は1週間ミーシャを同行して、右足を完全に治そうと思っていました。ところが、16日に空港で会うと、ま



2013年11月

た両手足がひどい症状になっていたのです。



空港から目的地のオブルチ市まで4時間ほどかかるので、車中でレシチンと「調味粉」入りチョコレートを食べさせました。

それから、古田さんが固まった重症の左腕、私が揺れる右腕を、指圧とマッサージで治療。

古田さんは、まったく開けなかった握り拳を、一瞬ですが開くようにし、私も、両腕の揺れと震えをかなり治めました。



食事に、レシチンと調味粉入りドレッシングをかけて食べさせ、部屋で治療を始めると、「足の骨が変形しているのでは」と古田さん。

足首が限界まで内側に曲がっているのに、外側にこぶができていました。

びくともしなかった足首を、初日は少しゆるめただけで終わりました。

2日目の17日夜、足の変形が少し緩んできました。それから古田さんが足首



がゆるむツボを見つけ、私も加わって20ほどのツボを見つけたので、足首は簡単に伸ば

せるようになり、左腕のこぶしもゆっくりと大きく開くようになりました。

足がまっすぐに伸びたので、よく見ると、骨は変形していません。

室内を歩かせると、足首も足も、まっすぐなまま、歩くことができました。

これで治る、と思ったのですが、角を曲がるたびに、少しずつ元に戻るので。

18日夜には、簡単に足首を伸ばせて、まっすぐに歩きました。

ところが、やはり室内を何周か歩いているうちに、元に戻って曲がっていくのです。

その後も、朝晩治療しましたが、この日が良くなったピークで、残念ながら帰国までに治すことはできませんでした。



1 kg 当たり 263 ベクレル。

タチアナさんの庭は8ベクレルなので、灰を自家用の畑に撒いていることが障害の主要原因らしいことが判明。

カルシウムの多い化学肥料を撒くことにしました。

指圧の技術は、コヴァリン村の近くの町のマッサージ師ヴァレンティーナさんに3日間かけて伝え、やはりレシチンを渡し、1年間、週に1度のマッサージ治療が受けられるように、500ドルを支払ってきました。

これで、ミーシャが治る方向に行ってくれるといいのですが。

薪の放射能汚染が障害の主要原因

ミーシャの家に行くと、煮炊きや暖房に薪が使われていました。すぐ灰を検査すると、

※さいたま市の当基金事務所の表土は400ベクレル。油断すると、日本でも被害が出ます。

野口体操

みちぞう

野口三千三(1914～1998)東京芸術大学教授が行っていた、力を抜き、自然の原理に合わせて動くことで、体がうまく動くようになることを追求した体操が「野口体操」です。

私は腰痛を治そうと野口体操教室に通い始め、先生の晩年に13年、師事しました。

野口先生を撮影するのは私が一番うまかったので、先生の写真の多くと、野口体操のビデオは私が撮影したものです。

野口体操に基本形はありますが、定型はありません。

野口先生が亡くなられた後、弟子がそれぞれ自分流に継承した野口体操教室を開いているので、体験してみられることをおすすめします。ただし、野口先生の能力は抜きん出たので、弟子の教室では、あの魅力を体験するのは無理。本当の魅力は、野口体操教室を記録したビデオ映像にしか残っていません。

「野口体操」と「野口整体」は別のものです。野口体操の授業ではときどきマッサージも教えていました。

「治る快適」体験

頭や足が痛いのが普通になっている人たちに、
痛みがとれて快適になる体験をしてもらおうと
学校や村を訪問したとき、古田さんが治療。
快適さの体験は、地域に影響を与えるでしょう。



ストヴピャキ村議長



コヴァリン村議長



モジャリ村学校副校長



ノヴィ・マルチノヴィチ村学校長



ビグニ村議長



エルコフツィー村議長



モジャリ村学校生徒



オブシュキ村学校長



チェルノブイリ連盟副代表



ニコライ・ラーザレフ博士

整体師・古田勝彦さんの連絡先 ☎ 080-1442-9365

メール :katsuhiko.f1985@gmail.com

〒 533-0004 大阪市東淀川区小松 1-15-14 第2パレス1-E号

第Ⅱ部 日本人を救う日本の土

放射能汚染、作物、土と人間

ニコライ・ラーザレフ博士
(ウクライナ生物資源・環境利用国立大学
農業放射線学研究所・副所長)



農業放射線学研究所は、チェルノブイリ原発事故後、すぐに設立されました。事故前にも、もちろん専門家はいましたが、ほとんどロシアにいたので、事故直後、その支部がベラルーシとウクライナにでき、今はそれぞれ独立した研究所になっています。

いま、日本に出ている問題や現象と、チェルノブイリ原発事故の直後に、ウクライナで起きたことは似ています。

ウクライナの場合は、事故直後の数週間で放射性ヨウ素を浴び、事故から5年後に6000人の子が甲状腺ガンの手術を受けました。

予測では、7年後に現れるはずでした。

日本では、放射性ヨウ素が海の方に飛んで行ったので、あまり影響しなかったと聞いていますが……。

今、危ない放射性物質

現在、一番危ない放射性物質はウクライナの場合、セシウム137とストロンチウム90です。

チェルノブイリ原発事故では、放射性物質の大放出が10日～12日くらい続きました。その時期に天候がいろいろと変わったため、汚染状況は均一ではありません。

たとえば、同じ村でも1つの通りはすごく汚染され、もう1つの通りはまったく汚染されていないことがあります。

放射性セシウムとストロンチウム90は、土壌から植物に取り込まれ、事故後1年たってから人の体に入りました。

ウクライナ北部のここポリーシャ地方は、汚染が多かったのですが、土がとてもやせていて、カリウムとカルシウムがすごく少ないので、もう一つの問題が出てきました。

土壌にカリウムが足りないと、植物は代わりにセシウムを、カルシウムが足りないとストロンチウムを吸収します。化学的な特徴が、カリウムはセシウムと、カルシウムはストロンチウムと似ているからです。

もしカリウム肥料を土壌に入れば、植物の汚染は4分の1から8分の1くらいに減ります。

また、ポリーシャ地方には酸性土壌が多いので、酸性だとセシウムとストロンチウムが水に溶けます。土の条件によって大きく異なりますが、植物への移行量は簡単に100倍くらい増えます。

鉱物に固く結びつくセシウム

放射性セシウムは、粘土質にある鉱物に固く結びつきます。鉱物粒子が小さければ、結

びつきは強くなります。

日本の田んぼには粘土質の土壌があるので、セシウムは粘土質に固定され、植物にはあまり移行しません。

森の多いポーリーシャ地方では、有機物と粒子の大きい砂が多いので、セシウムは土壌に強く結合できないため、植物に多く移行するのです。

セシウムがたくさん落下しても、粘土質の鉱物がたくさんある土壌なら、植物に移行せず、ポーリーシャ地方と比べて、きれいな農作物になります。

南のポルタヴァ州などでは、粘土質の土壌が多いので、セシウムは土壌と結合して植物にあまり移行しません。

放射性セシウムで汚染された農産物で、基準を上回って問題になっているのは、ここポーリーシャ地方だけです。

5～10cmにとどまるセシウム

放射性セシウムが落ちると、しばらくは地表から5cmぐらいの間に存在します。

事故から28年たっても、セシウムの大部分は地表から5～10cmに留まったままです。

その同じ深さに植物の根が張っていますから、汚染が植物へ移行するのです。

セシウムは、10cmより深くには少ししかありません。10cmから深くに達するには、長い時間がかかるのです。

これは、雨が降ってもあまり変わりません。

非常にきれいな砂地の場合、セシウムは透過しやすいのですが、そういう土地は非常に少ないのです。

セシウムが5～10cmの深さに入った普通の土壌を、特別な機械で30～40cmまで深く耕すと、セシウムの多くが植物の根が届かないところに埋設されることになるので、作物

への移行量が少なくなります。

そうしておいて、次からは、上の方だけを耕して作物を植えればいいのです。

危ない食品は

この地域では、基準を10倍上回った1kg当たり1000ベクレルの牛乳が見つかることがあります。

キノコは50万ベクレルぐらいのものもありました。

猟で獲った野生の動物の肉、ベリー、蜂蜜もセシウムを多く含んでいます。

(注) 講演が行われたオブルチ市で2013年の年次報告書には、次の数値が出ていた。

ポーリーシャ地方の中ではオブルチ地区は汚染が少ない方だが、日本人が見ると、驚くほど高い値である。

<牛乳>最大値は165ベクレル

基準違反率は3.2%。

<キノコ>最大値は26,670ベクレル

基準違反率は59.1%。

<野生動物の肉>最大値は15,600ベクレル

基準違反率は21.2%。

<ベリー>最大値は6,600ベクレル

基準違反率は32.8%。

<蜂蜜>最大値は3,350ベクレル

基準違反率は9.5%

興味が失われた放射能汚染

食品は、販売されるものはすべて検査されます。基準より高かったら持ち主に戻します。

販売される食品は放射能汚染をコントロールできますが、問題は、個人で収穫するものです。森に行って、自分で採って、どのくらい汚染されているか興味もなく、食べています。森の近くに住んでいる人たちは、野生のものに対策が取りにくいので、放射線のリス

クが高くなります。

事故直後は、すべての村に小さなラボができて、簡単に検査してもらえました。教育を受けた人たちは、真面目に検査を受け、家で食べる食品もかなりきれいでしたが、そうでない人は検査しませんでした。

今でも市の検査機関に持ち込めば測ってもらうことはできますが、そうする人はあまりいません。

水の中に入っているセシウム

セシウムは、体の組織や植物の組織に化学的な結合をしておらず、水の中に入っています。水が、汗や尿として出ていくときに、セシウムも一緒に出ていきます。

ですから、水分をたくさん摂れば、セシウムを減らす対策になります。

食品の場合も、水分がポイントです。

牛乳だと、脂肪を分離させたバターとかサワークリームは、水分と一緒にセシウムが抜けています。

肉を煮ると、セシウムの80%は煮汁に出ています。沸騰したら、最初に出た煮汁を捨てれば、セシウムを減らすことができます。

(注：この対策では、他の水溶性ミネラルも減るので、別に補う必要がある。

これまで、魚と昆布の粉末だし『調味粉』をプレゼントしてきたが、体調が良くなったと人気があるので、ウクライナでもミネラル不足の人が多くと考えられる。日本は水煮食品でミネラル不足になって心身に不調が出ているが、ウクライナにもそれと似た状況がある)

ポリーシャ地方でキノコを採ったら、茹でれば、わりときれいになります。測定したら、1/10に減っていました。

汚染地に住む心構え

ポリーシャ地方では30ぐらいの村で、肉と牛乳が基準を超えることがあります。

福島もそうですが、放射能汚染で住めない土地は、汚染された土地より狭いのです。

汚染された土地に人が住んでいて、今も農作物が栽培され続けています。

汚染された地域に住んでいる住民は、放射能に対して恐怖感を持つわけにはいきません。恐怖感を持つと、それだけで健康を損ねることになるからです。

しかし、健康を守るために対策は取らねばなりません。

特に子どもたちには、自分でコントロールして、きれいな食品を食べて健康になれる情報を教える必要があります。

キノコは高い線量のものが多いですが、被曝の最大原因ではありません。

内部被曝の原因の80～90%は肉と牛乳です。キノコほど線量が高くないにしても、毎日多く食べる食品だからです。

ただし、国は、これらのことにあまり気をつけていません。

国は今まで、子どもに対していくつか対策を取っていました。幼稚園と学校には、コントロールされた食品を供給していましたが、この対策はなくなりました。

本当にいい機会なので、日本の皆さまに心から感謝の意を申し上げたいと思います。

日本も大変な時期なのに、ウクライナの子どもたちに手を差し伸べて、化学肥料を援助してくれたのはうれしいですし、とても感謝しております。

質疑応答

どのくらい飛ぶ？

Q ストロンチウムとセシウムは、どのくらい遠くまで飛んで汚染したのですか。

A ストロンチウムはガスの状態にならなので、遠くへは飛びません。セシウムはガス状になるので、爆発で高く上がると、とても移動しやすく、福島原発事故から10日後に、飛んできたセシウムがウクライナでも発見されました。

砂地は酸性？

Q ピシャニツア村は砂地が多そうでしたが、砂地は酸性ですか。

A 砂地は酸性ですが、有機物の多い酸性土壌もあります。

粘土質の土を入れればいい？

Q 粘土質が放射能を結合してくれるなら、粘土質の土を入れればいいのですか。

A そういう対策もやってみました。とてもいい結果が出ましたが、国は予算の関係でサポートしてくれなかったなので、実施していません。

家の周りの畑に、個人的に鉋物肥料を入れて対策をとった人の作物はきれいです。

放射能が増えることはある？

Q 放射能が減ってきた作物が、同じ場所なのに増える例はありますか。

A 事故当初を除けば、めったにありません。ただ、穀物では減っていても、豆類を植えると汚染が多くなります。

落ち葉から汚染する？

Q 野生のキノコやベリーが汚染するのは、落ち葉からですか。

A そうです。放射能の雲が森の中を動くと、枝、葉っぱによって止まります。

落葉樹林なら1年後に落葉して、そこからキノコ、ベリーの汚染が始まります。

松林なら2～3年は葉が枝についているので、汚染が始まるのが少し遅くなります。

腐葉土を入れていい？

Q 畑に腐葉土を入れますが、それがセシウムで汚染されていれば、やめた方がいいですか。

A 落ち葉をコンポストとして利用すると、土壌に良い影響を与えます。酸では解けないフミン酸が作られるので、損より良い結果の方が多いと思いますが、落ち葉の汚染度によります。

山の汚染は早く平地に出る？

Q 日本は山が多いので、セシウムは水に溶けて早く平地に降りてくると思いますが。

A 日本は粘土っぽい土壌が多いので、セシウムの移動はゆっくりゆっくりだと思います。

セシウムは細かい粘土のような粒子に結合するので、90%以上が結合して、ウクライナほど作物への移行は多くならないと思います。

ただし、土壌の酸性度をコントロールしなければなりません。酸性度が高くなれば、結合したセシウムが溶け出すので、それを防がねばなりません。

放射能を吸わせる植物は？

Q ヒマワリより効率よく放射能を吸い上げる植物があると聞いたのですが？

A 植物で吸い上げる方法は、ある時期、すごく流行っていましたが、思ったより効果的ではありませんでした。

なぜかというと、1年間で吸い上げるのは5%くらいで、そのときに土壌から良い成分も一緒に取ってしまいます。

効果を5%と考えると、少なくとも20年間は植え続けないと効果がありませんが、その間に土壌が悪くなってしまいます。

その上、植えた植物をどこかへ処分しなければなりません。それで、この方法は広まらなかったのです。

カリウムを撒く量は？

Q どのくらいカリウムを撒けば、セシウムが作物へ移行するのを減らせるのですか。

A このポーリーシャ地方では、カリウムを土壌100gに対して4mg入れれば、作物への移行量が半分くらいに減ります。

植物は吸収するのに制限がありますから、制限量を超えて入れても意味がありません。

牛乳と肉は食物連鎖？

Q 牛乳と肉の汚染度が高いのは、食物連鎖で起きるのですか。

A 牛乳と肉が汚染される原因は同じで、牛が草を食べているからです。

畑の牧草を食べている牛か、自然な牧場の牛か、で違います。

牧草畑には、カリウムやカルシウムの肥料を入れ、農業機械でかき混ぜるので、土壌の粒子とセシウムが接触して結合します。それで植物に移行しなくなります。

セシウムは存在していても、草への移行が少ないので、牛のセシウム摂取量が少なく、それで牛乳がきれいなのです。

自然な牧場は、森や川の近くにあるのに、汚染対策が取られていません。カルシウム肥料(石灰など)は酸性土壌の中和剤として働きますが、この肥料を土壌に入れないため、酸性土壌からセシウムが水に溶け出て、草への移行が多くなるのです。

ラボがなくなったのは？

Q 放射能を検査するラボが、今はなくなったと知りました。なぜですか。

A 人間は、どんなことが起きても、時間がたてば慣れて、あまり気をつけなくなります。例えば、測定ステーションがあっても、今は1年間で10人しか測りに来ないのです。

でも、私が思うには、やり方がまずかった。やはり住民を納得させないとダメです。

2つ目は、指導者の世代が変わって、事故の知識があまりない専門家になりました。放射性物質より、別の問題に興味が移っていくのです。

だから、指導者たちにも、チェルノブイリ事故では、長い間、問題が残っていると納得させなければなりません。放射性物質は、半減期の10倍くらいの期間が過ぎれば忘れることができます。セシウムの半減期は30年ですから、300年たてば忘れてもいいけれど、それまで忘れてはいけないのです。

青い袋

Q 日本では放射能の濃度が高い表土を取り除いて、青い袋に入れて畑や道端に置いています。

A 日本で青い袋が並んでいるのを見たとき、私たちは驚きました。あれでは、外部被曝の線源になります。一カ所にまとめたら高い線量になるので、やはり埋設しないと。

これは調べてみる必要がありますが、青い袋に入れて積んでおくより、5~10cmの土壌にセシウムを結合させたままの方が、被害が少ないかもしれません。

お金もかかるので、自然のままの方がいいのではないのでしょうか。

[オブルチ市での3月16日の講演とツアー参加者との質疑をまとめた。 文責：小若]

第Ⅲ部 食品の放射能基準を崩壊させる事実

子どもの頭痛・足痛

1 ベクレル/kg で食品規制を

私たちは、一般食品の放射能基準を現行の100分の1に下げ、1kg当たり1ベクレルに下げるべきと主張しています。

それは2013年3月に、ノヴィ・マルチノヴィッチ村学校での親子調査で、72%が頭痛を訴え、この村の子どもの食事が1kg当たり1.1ベクレルだったからです。

これに安全率を掛けて基準を決めると、検査が難しい低線量になるので、まずは被害が出るのがわかっていない線量で規制すべきと言われています。

「1.1Bq/kgで頭痛」を証明

この「1.1ベクレル」は、根拠が状況証拠で、放射能を減らして、頭痛の人が減るかどうかを検証していませんでした。

そこで、安全基金は昨年5月、ノヴィ・マルチノヴィッチ村学校に1000ドル分の複合化学肥料を寄付。お金がなかったので量が足りず、一部の生徒だけに化学肥料が配られていました。

そのため、化学肥料を撒いたグループと、撒いていないグループに分けることができ、今回は科学的に必要とされる手法になっていました。

しかし、私は、同じ村の中で2グループに分ける手法は人道上、問題があるので、できるだけ選択しないつもりです。

カリウム肥料を田畑に入れば、作物中の

セシウム137が減ることは、専門家の間では常識。日本政府もそれを認め、補助金を出して福島では化学肥料を撒いています。

それで、今回の調査の主目的は、化学肥料を撒いてセシウム137が作物中から減って、摂取量の減った子に、頭痛が解消した子が増えているかどうかを確認することでした。

学校で、私たちが挙手による調査を行うと、1年前に頭がすごく痛かった子は7人。それが今は1人に減っていました。頭が痛くなかった子は6人だったのが、今は15人に増えていました。

私たちが現地に行く前の2月15日に、この2倍以上の規模で、同様のアンケート調査が行われており、その結果の翻訳が帰国後に届くと、やはり化学肥料を畑に撒いた家の子に、頭痛の消えた子が増えていました。

これで、1kg当たり1.1ベクレルの食事で頭痛が出ていたことは、誰も否定できなくなりました。

アンケート調査で、他に増えていたのは、足痛が消えた子と、学校を休まない子です。めまい、風邪も、改善が期待できそうな兆候が現れていました。

第三種汚染地域でも効果

初めて化学肥料を提供したのは、第三種汚染地域にあるピシャニツア村とモジャリ村で、やはり2013年5月のことです。

ピシャニツア村学校の調査では、化学肥料を畑に撒いて、キノコとベリーを食べなかつ

た子は9人。その内、足が痛くない子が6人いて、5人は以前、足が痛かった子でしたから、足痛は減っていました。

キノコ、ベリーを食べている子は、8人全員が「足がときどき痛くなる」ので、足痛は減っていません。

汚染がひどい地域でも、キノコとベリーを食べず、化学肥料で作物に含まれる放射能を減らせば、痛みが消えて健康を回復できることがわかりました。

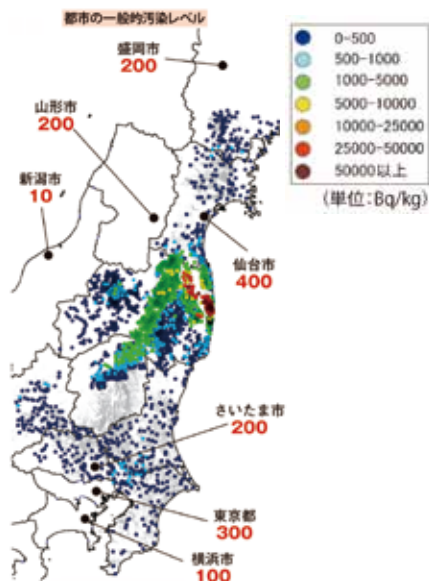
ただ、「汚染がひどい」といっても、土壌1kg当たりのセシウム137は、ピシャニツア村が255ベクレル、モジャリ村が127ベクレルです。日本に当てはめると、関東の半分は、これを超えています。

調査地の土壌汚染

	Cs137	Sr90
㊦ ピシャニツア村	255	26
㊧ モジャリ村	127	65
㊨ コヴァリン村	8	2.5
㊩ ノヴィ・マルチノヴィチ村	7	3

(2013年8月7日) (Bq/kg)
ウクライナ生物資源・環境利用国立大学
農産物品質安全ウクライナラボ

農地土壌の放射性セシウム濃度分布図



ウクライナは、放射能が作物に移行しやすい土壌なので、被害が出ていますが、日本は、放射能が作物にあまり移行しないので、注意していれば大丈夫です。

全村人の被害を防ぐために

化学肥料を撒く必要があると考えたのは、第三種汚染地域の子どもたちに頭痛や足痛などの健康被害が出ていることを2012年10月のツアーで知ったから。15歳ぐらいまでの子のほとんどに、60代半ばの私より多くの痛みが全身のあちこちにあったのです。それで、子どもたちの将来がとても心配になりました。

それから3ヵ月後、非汚染地域のコヴァリン村から、キノコと川魚を食べなければ、村に住み続けているのに痛みが消えた、という最初の検証情報が入ってきました。

これは朗報でしたが、汚染のひどい第三種汚染地域では、キノコなどを避けても、小麦やジャガイモや牛乳から、コヴァリン村の食事より多くの放射能を摂取してしまいます。

健康が多少改善したとしても、まだ多くの健康障害が残ることは間違いありません。

あの子たちを救うには、食べ物のすべてから放射能を減らすしかないと考えて、化学肥料をプレゼントしたいと、『食品と暮らしの安全』の購読者の方々に呼びかけました。

ありがたいことに、多額のカンパが集まり、先に述べた第三種汚染地域にある2つの村に各5,000ドル、計10,000ドル分の化学肥料を2013年5月にプレゼントできました。

実はこのとき、10,000ドルでは足りないと村長から言われたのですが、タチアナさんの努力下、村人全員にいきわたる量が贈られました。

届いたときの写真を見ると、ピシャニツア村では、校長や教師が届いた化学肥料を全

員に配るようチェックしていました。

「ウクライナは賄賂の国なので、これを直さないと発展しない」と今回のツアーでも、何度か言われました。ですから一般的には、お金をいくら渡しても、どこかへ消えていくだけで、成果が挙がらないのがウクライナの現実です。

しかし、私たちに協力してくれている友人たちは、子どもの健康を改善するために良心的に仕事をしてくれ、10,000ドルで十分に足りる量が確保されていました。

その直後、冒頭に紹介したノヴィ・マルチノヴィツ村に1,000ドル分の化学肥料を寄付しています。

買い付けが上手に

こうして経験を積んだので、今年は化学肥料の買い方が上手になり、10,000ドルの予算で2種類の複合化学肥料を50kg袋で500袋、計25トンが購入されています。

モジャリ村とピシャニツァ村の土壌にはストロンチウム90が1kg当たり65ベクレルと26ベクレル含まれていました。こんなにひどい汚染は、福島でも東半分の一部だけ。

それで、カルシウムの多い肥料を各4トン配ります。カルシウムはストロンチウムが作物へ移行するのを減らすからです。



我々のプロジェクトで購入した化学肥料

非汚染地域の5村には、セシウム137対策をメインにして、カルシウム量が少なくカリ

ウムが多い肥料を各4トン配ります。

神経に異常が生じているワジムとミーシャの家には、カルシウム量が多い肥料が1袋(50kg)ずつ渡されました。

今回のツアーの最中にも、第1回から調査に協力してくれて健康被害が出ていた25家族を訪ねて、1袋ずつ配ってもらいました。これとは別に、タチアナさんが住むコヴァリン村に6トンが、配られています。

私たちが帰国後に、タチアナさんが非汚染地域の2つの村に行って、今年分の化学肥料を渡し、放射能を減らした食品で多くの人が健康になったことを、村人に話しました。

「村の皆さんはとても喜んで、日本の皆さんに感謝の意を伝えてほしい」と言われたとのことでした。

この化学肥料を撒いても、作物の収穫は秋で、それを食べ始めて2ヵ月後から、痛みが減り始めるので、成果が出るのは来年です。健康を回復した情報が、私たちにもたらされるときには、日本の評価が確実に高くなっているでしょう。

言葉や習慣の違いから、情報がうまく伝わらず、すべての学校で予定どおりの成果が出ていないのは残念です。ただ、それが新たな知見や注意点がわかる理由になっているので、ご容赦ください。

多くの方々からの多額のカンパのお蔭で、私たちの実証調査が、放射線の人体影響の科学分野で、世界を断然リードしていることは間違いありません。

次に、詳細なデータを掲載しました。土壌と食品汚染のデータも掲載したので、あなたが住む地域で、どのような健康被害が出る潜在的な可能性があるかは、これを見て見当をつけてください。

調査結果 子どもの痛み、健康状態

モジャリ村学校（化学肥料を 2013 年 5 月に提供）

◆調査対象：11 年生（17 歳）22 人

	《頭痛》	《足痛》
昨年痛かった人	17 人	14
今年も痛い人	13 人（4 人減った）	13（1 人減った）

◇キノコ、ベリーを食べないように改善されていないらしい



《汚染データ》（ベクレル/kg）
 土壌 Cs137=127 Sr90=65（2013 年）

食品	Cs137	Cs137 の最大値
コケモモ	25	キノコ 26670
ライ麦	10	ベリー 6600
牛乳	5	蜂蜜 3350
ポテト	2	
チーズ	2	
リンゴ	<1.3	
リンゴジャム	<1.3	
クルミ	<1.3	
小麦・カラス麦	<1.3	
人参	<1.3	

(オブルチ年次報告書 2013 年)

(2012 年)



ピシャニツア村学校（化学肥料を 2013 年 5 月に提供）

◆調査対象：9～11 年生（年齢 14～17 歳）17 人

（キノコ、ベリーを食べているかどうかで、2 群に分けて調査）

	食べている人（8 人）	食べていない人（9 人）
足痛	ときどき痛くなる （週に 2 回ぐらい）	今も痛くなる 3 痛くない 6 （前は痛かった） 5
	週 4～5 回	0
	週 1 回	5
頭痛	月 1 回	3
	痛くない	1
	最近、体全体が良くなった	2



《汚染データ》（ベクレル/kg）
 土壌 Cs137=255 Sr90=26（2013 年）

食品	Cs137	Cs137 の最大値
野生キノコ	465	キノコ 26670
野生キノコ	380	ベリー 6600
リンゴ	2.2	蜂蜜 3350
ブドウ	2.3	
人参	2.8	
小麦	2.6	
カボチャ	3.4	

(オブルチ年次報告書 2013 年)

(2013 年)



コヴァリン村学校 (最近、化学肥料を配ったが、まだ使われていない)

◆(無作為の調査は初) 調査対象：4歳～15歳の子ども31人と大人13人

		《子ども》	《大人》
◆頭痛	いつも痛くなる	0	2
	時々痛くなる	10	10
	痛くない	11	1
	(答えなし)	(10)	
◆足痛	いつも痛い	8	3
	時々痛い	16	8
	痛くない	3	2
	(答えなし)	(4)	
◆鼻血	いつも出る	0	0
	時々出る	0	6
	出ない人	29	7
	(答えなし)	(2)	
◆風邪	よくひく	3	4
	時々ひく	24	8
	ひかない	3	1
	(答えなし)	(1)	
◆めまい	よくある	3	2
	時々ある	18	10
	ない人	6	1
	(答えなし)	(4)	

《汚染データ》(ベクレル/kg)
 土壌 Cs 137=8
 Sr 90=2.5 (2013年)

食品 Cs137

キノコ	平均	210
川魚		7~8
肉		痕跡
鶏肉		<10
イチゴジャム		<10
牛乳		<10
クリーム		<10
ポテト		<10
小麦		<10
野菜		<10
(以上 2012年)		

37メニューの食事 <1.8
 (2013年)

オブシュキ村学校 (ポルタヴァ州)

◆(初めての調査) 調査対象：9～11年生

(9年生5人+10年生5人+11年生4人、15～17歳)



		《子ども 14人》	《大人 10人》
◆頭痛	ときどきすごく痛くなる	0	0
	ときどき少し痛くなる	12	7
	痛くない	2	1
	(答えなし)		(2)
◆足痛	ときどきすごく痛くなる	0	3
	ときどき少し痛くなる	3	5
	痛くない	11	2
◆自律神経失調症	重い人	1	7
	軽い人	1	2
	ない人	12	1
◆鼻血	よく出る	1	0
	ときどき出る	3	2
	出ない	10	8
◆上記4症状のない人		0	0
◆キノコをよく食べる人		0	3 (週2~3回)
◆川や湖の魚をよく食べる人		5	5
◆ベリーをよく食べる人		1	0

《汚染データはないが、ノヴィ・マルチノヴィツ村と同程度と推定》



ノヴィ・マルチノヴィッチ村学校（ポルタヴァ州）

化学肥料を 2013 年 5 月に提供。
 受け取った人は全員が直後に撒いた。
 ※ 化学肥料を撒いていない子 3 人はデータから除外。
 ※ 大人は化学肥料を 3 人しか撒いていなかったため、
 データから除外。

◆調査対象：5 年生～ 11 年生（10 歳～ 16 歳）35 人

◆頭

1 年前	すごく痛かった	7
	時々少し痛かった	16
	痛くなかった (答えなし)	6 (6)
	現在	
現在	すごく痛い	1
	時々少し痛い	15
	痛くない (答えなし)	15 (4)

◆足

1 年前	すごく痛かった	2
	時々少し痛かった	19
	痛くなかった (答えなし)	12 (2)
	現在	
現在	すごく痛い	2
	時々少し痛い	11
	痛くない	22

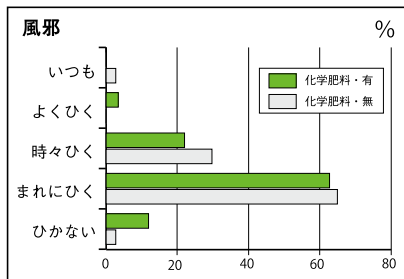
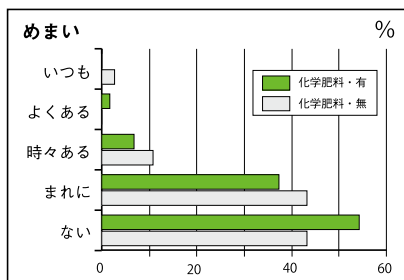
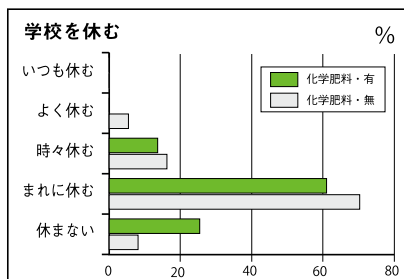
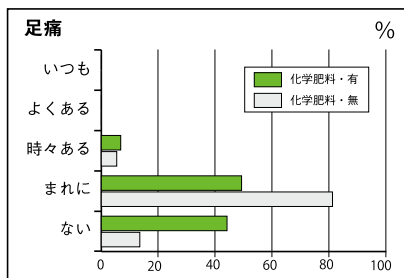
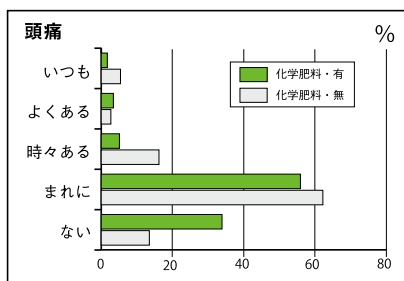
《汚染データ》(ベクレル/kg) (2013 年)
 土壌 Cs137=7 Sr90=3
 食事 Cs137=1.1

《参考》2013 年 3 月の拳手調査

◇ 10 年、11 年生（15～17 歳）と父母、計 25 人

頭が痛い	18 人 (72%)
鼻血が出る	13 人 (52%)
風邪をひきやすい	12 人 (48%)
問題がない人	0 人

アンケート結果 (2014 年 2 月 15 日)
 化学肥料使用 59 人、不使用 37 人



ニコライ・ラーザレフ博士&小若対談

小若 我々が調べると、セシウムが1.1ベクレル/kgの食事で頭痛が出ていました。

このことを山本太郎議員が政府に質問してくれたのですが、政府は「承知していない」と無視。日本では、国も専門家も相手にしてくれません。

ニコライ ウクライナには「自分の国に事実を言っても効果がない」という諺があります。私は、ウクライナ政府にいろいろとアドバイスしてきましたが、あまり聞いてくれないのと同じでしょう。

ただし、日本はウクライナから尊敬されているので、この地域ですごく尊敬されている小若さんが来て、同じことを言うと、すごく感動して、それに従い、いい結果が出ると思えますよ。

小若 放射能の規制は「死亡統計」と被曝量を調べて、死なない線量に安全率を考量して決めています。

「痛み」などの自覚症状は見逃されているので、健康にさまざまな影響が出て不思議ではないと思います。

ニコライ 正直にいますと、チェルノブイリ原発事故によって、今起きている人体影響について、現在のところ、正確な信頼できる情報はありません。

医師たちは、血液はどうかなど、科学的なデータに従って患者を見ています。

ところが、皆さんは「頭は痛いですか?」「お元気ですか?」「何か問題はありませんか?」という角度から見えています。

それは、とても大事だと、私は今日、理解できました。

「元気か?」「頭は痛い?」「気持ちはどうか?」こういうことは、科学的には評価でき



ませんが、でも、生活には大変重要です。

けれども医師たちは、こういうことを基準として考えていません。

だから、医師たちが、こういうアンケートをとることはなく、皆さんが調べているような客観的データは、他にはありません。

もしかすると、安全基金が、医療の学問分野で新しい方向を開拓するかもしれません。

私が働いているのは、農業放射線学研究所ですが、大学には医療センターもあります。

農業と健康は関連しています。農業と食料に問題があるから、健康に問題をもたらしているわけで、研究者がお互いに議論していなかったのは、おかしかったと思います。

ウクライナでは汚染された土地に、300万人が今も住んでいます。

皆さんが、チェルノブイリ原発事故に関する情報を収集してくださることを歓迎します。

そして、皆さんに集めていただく情報は、今日、行ったように事実を反映するものでなければなりません。なぜなら、収集した情報は、今後、政治家やいろいろな活動家が使用することになるからです。

食品汚染について、皆さんが健康に生活できる情報を集めて、日本国内だけでなく、ウクライナでも広めてくださることは、とても嬉しいことです。

小若 今後ご協力をお願いします。

食品の汚染推移

ポルタヴァ州 防疫省防疫研究所 測定部 ニコライ・ザゴルリコ部長

日本の汚染がどう推移するかを推定できる素晴らしい検査データ。30年も続けて極低線量の検査をするのは大変だったでしょうが、日本にとって貴重なデータを作成してこられたザゴルリコ部長に、学校で、食品汚染の実情を子どもと親に講演していただきました。



ポルタヴァ州の防疫省防疫研究所はずっと昔からあり、食品の放射能も測ってきました。

チェルノブイリ原発事故後、放射線の部門ができて、このポルタヴァ州のあらゆるところに測定ステーションができて、州の汚染状況を調査してきました。

このグラフを見てください。これは肉のグラフで、1967年からのポルタヴァ州の検査結果です。86年に高くなるのは、チェルノブイリ事故のせいです。

牛乳のセシウム、ストロンチウムは、86年のピークでは2ベクレルで、今はもっと低くなりました。

ジャガイモのストロンチウムも86年がピークで、3.25ベクレル。その後は減少しています。ストロンチウムの許容基準は20ベクレルなので、それを考えると、まったく少ない数値です。

小麦が原料のパンは、86年がピークで3.2ベクレル。その後は低下しましたが、4年後に小さなピークがあります。これは他の地域

から小麦が入ったのかもしれませんが。その後はずっと低い数値が続いています。

次はドニエプル川の魚の汚染です。

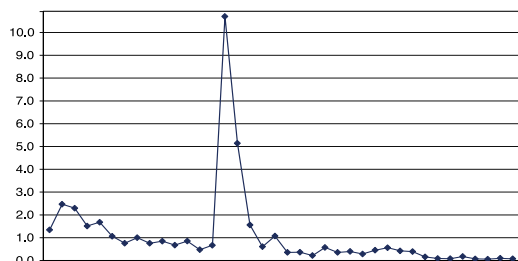
86年に大きなピークがあり、その後、何度もピークがありました。それはドニエプル川の上流にある汚染地域のポーリーシャ地方から流れ込んでいるからです。今は、もう流れ出てしまったので、今ここに生息している魚は1ベクレル/kg以下になっています。

マッシュルームなどのキノコ、ベリーやコケモモなどは、北の汚染度が高いポーリーシャ地方からも来ているので、気を付けないといけません。市場でも売っているので、注意してください。

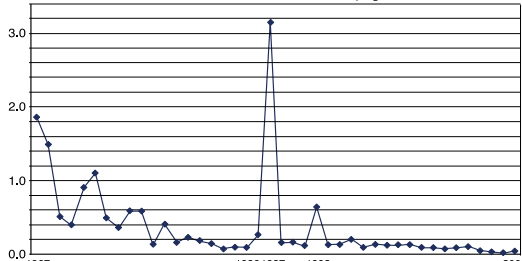
というのは、市場で買われた食品が、検査のためラボに持ち込まれると、地元の食品だと1ベクレル以下なのに、北の地域から来ているものは600ベクレルより高いこともあるからです。

ベリーとか、キノコとかも、地元の地域で採れたものを食べてください。

肉のセシウム-137含有量(Bq/kg)



小麦のパンセシウム-137含有量(Bq/kg)



※推移図はたくさんあり、食品と暮らしの安全基金 ホームページで公開しています。

コヴァリン村の家族を再訪

放射能を多く含むキノコ・川魚を抜いて、放射能の少ない肉・牛乳を提供する「食事プロジェクト」を一昨年11月から昨年3月まで実施。

昨年3月の第4回調査で、参加した9家族の健康状態が改善したことを知りました。来日したタチアナさんからその後も元気だと聞いた家族を再訪しました。

レリャック家

正装での出迎え

正装したヤーナ（13歳）が歓迎のパンと塩を持って出迎えてくれました。

ヤーナは、生まれたときから湿疹やサメ肌で悩んできました。どこの病院に行っても治らなかった皮膚疾患ですが、放射能を抜いた食事と、魚・昆布の粉末だし、高純度ワセリン（サンホワイト）の使用で昨年3月にはきれいに治りました。

暗かった気持ちも明るくなって、今はダンスのサークルに参加して、友だちがたくさんできたと言います。

次男ゼーニャ（15歳）がすごく痛かったのは足です。3歳ころから毎日足が痛かったのですが、プロジェクトが始まるとだんだんマシになってきて「快適」に。その後も改善しているというものの、今でも1カ月に1度か2度くらい痛みが出るようです。

この1年ですっかり逞しくなり、今ではお父さんより背が高くなっていました

お母さんのアーラ（41歳）さんから心臓が良くなったと聞いて、驚きました。昨年3月の時点では、冬に太らなかつた、背中のかゆみが消えたと喜んでいたので、元気な方だと思っていました。血圧が高く、立ち上がる力が出なかつたこともあったそうです。

今年は、心臓はまったく痛みが出ない、血



圧もだいぶ正常になって、いい具合で、「元気になるといろいろなことがしたくなる」と

いうアーラさん。「庭に枝を組んで、休息用の小屋を造っているのよ、これから屋根に取り掛かるところ」と案内してくれました。

ジャンキフスキー家

子どもたちは学校に行っている時間で会えませんでしたがお母さん（リュドミラ）から話を聞きました。「1年前からだいぶ良くなっています」。

「ディアナ（長女・15歳）の鼻血は、今年になってからは1回だけ。ディアナ、イワンア（13歳）の足の痛みはなくなりました。下の子の痛みも軽くなりました。頭の痛みは、ほとんどありません。昨年3月よりもっと

良くなりましたよ」

お母さん自身は、毎朝、手の感覚がなく、朝の仕事を始めました。昨年3月の時点で1～2週間に1度くらいに減っていましたが、「今はとてもよくなって、最後に調子悪かったのはいつだったか、覚えてはいくらいです。心臓の痛みも、たまには痛いけど、だいぶ良くなりました」とうれしい報告です。



キリレンコ家

手足の痛みで寝られなかったナスチャ（14歳）。今は「痛くなくて、いい具合」。肺腫瘍については、「肺の具合は、とってもよくなりました

した。前は詰まっている感じでしたが、呼吸しやすくなりました。この5月に定期的な検査入院で肺の検査をします」

「寺澤先生からいただいた薬『ルミンA』は、

こちらの医師の了解を得て飲んでいました。12月に抗ガン剤を飲む予定でしたが、ルミンAを飲み始めたので、抗ガン剤は飲まずに済みました。このプロジェクトが始まってから、病気で入院したことはありません」とのこと。

お母さん（ソーニャ）からは、三女アーラ（7歳）は関節を痛がっていたけど、今はまったく忘れていて。次女のナージャ（8歳）も風邪をひかずに具合が良いと、家族が元気になっている様子を聞きました。

ヤレマ家

「最近、アリーナ（次女・8歳）が学校で社交ダンスを始めたので、足が痛くなりました

が、頭の痛みは、まったくありません。子どもたちも大人も元気になりました。子どもたちはよく勉強しているけど、記憶力がだいぶ良くなりました」とお母さん（エレーナ）。

古田さんから足の治療を受けると、アリーナはダンスを披露してくれました。

プロジェクト終了後にも、この家族にはだしの「調味粉」が届いていました。

「子どもたちはおとなしくなって、ワーワーということがなくなって、落ち着いた感じですよ。大人の方もそうですが」。

87歳になったお曾祖母ちゃんは「ずっと働いてきたけど、今はじっと座っているしかない。淋しいね」と受け答えが、昨年よりしっかりしているのが驚きました。



照れて、お母さんのののもとに駆け寄るアリーナ。右から4人目が長女のマリナ（13歳）。

プロホレンコ家

頭がとても痛かったセルゲー（8歳）は「今は元気。前のことは覚えていない」。弟のトーリャ（7歳）も「忘れた～」と。

お母さん（カテリーナ）は、子どもたちが「前は目の下が真っ黒でした。それが今年の



春には薄くなって、今は目の下のクマはすっかりなくなりました」と、健康状態が良くなっていると話してくれました。

「食欲が良くなったし、風邪をひく頻度が少なくなりました。頭痛も減ったし、足の痛みも出ない。いつも元気です。活発で、気持ちいい状態です」

双子のマーシャ、スベータ（4歳）は、風邪をひきやすく、よく入院していた弱々しい女の子でしたが、幼稚園に。風邪をひく頻度は少なくなったそうです。

コプチロ・コバリチュック家

ミハイル（74歳）ガリーナ（63歳）はお元気そう。家族の健康状態を伺いました。孫のイワン（22歳）は働き始めています。頭痛の頻度が少なくなったが、今は、甲状腺が膨



らんだ状態。

娘・イリーナさん（ナスチャの母）の乳腺の腫瘍は、繊維線種で悪

性ではなかったと聞き、安心しました。

孫娘ナスチャ（16歳）はキエフの短大に通っていますが、ちょうど帰宅して会えました。

貧血だった彼女は、赤血球が増えたと良い顔色をしていました。頭痛はまだありますが、頻度が減って、心臓の痛みがなくなったといいます。



この1年は入院しなかったし、元気に過ごせたと言います。

ビグニ村の3家族を訪ねて

ビグニ村は第三種汚染地域。そこに住む3家族に会ったのは、2012年6月。チェルノブイリ原発事故の10年後から体調は悪化の一途をたどり、さまざまな健康障害を抱えていましたが、「食事改善プロジェクト」を始めると、3家族20人全員の健康が改善されました。今回、訪ねると、「頭痛が減った。軽くなった」「全体的に元気になった」「良くなって、太りました」と感謝されました。



第IV部 放射線ガン死評価理論の終焉

「無作用線量」で規制を

0.011 と 100 ミリシーベルトの差

食事中にセシウム 137 が 1 kg 当たり 1.1 ベクレル含まれると、頭痛が起きることを、私たちは突き止めました。

これをヒトの被曝量に換算すると、年間 0.011 ミリシーベルトになります。

これまで、放射線でヒトに影響が出ると確認されていたのは 100 ミリシーベルト。

その根拠は、広島や長崎での被曝者のデータから、ガンで死んだ人は 100 ミリシーベルトで 0.5% 増加し、これ以上では、ガンで死ぬ人と放射線量は比例して増えることと、100 ミリシーベルト未満では、ガン死の増加が確認されていないからです。

日本政府も、国際放射線防護委員会 (ICRP) も、国連科学委員会も、年間 100 ミリシーベルトを規制の拠りどころとしてきました。

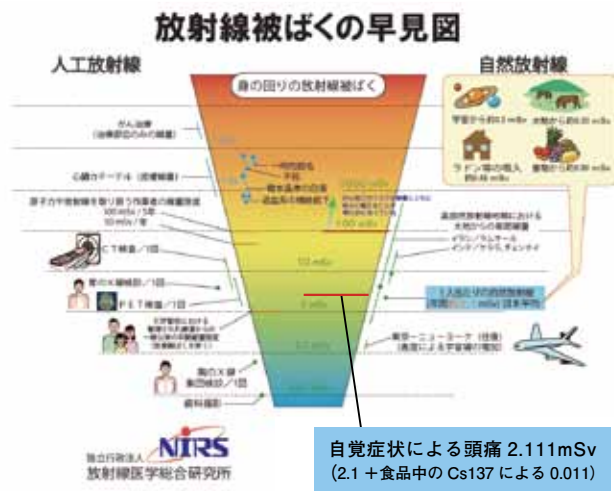
死亡統計では健康を語れない

痛みが出る被曝レベルの 1 万倍も緩い線量で規制が行われているのは、「死亡統計」で「ガン死」を調べて得られたデータを用いているからです。

ガン死のデータで、健康全体への影響を考えるのは間違っています。

健康影響は、化学物質を規制するときのように「無作用量」を用いて論じるべきです。

ヒトの体内に入る化学物質は、ネズミで「最大無作用量」を見つけ、それに安全係数として 100 分の 1 を掛けて使用量が算出されます。ネズミと人間の種差で 10 倍、子どもや



老人、男女差で 10 倍、これらを合わせて、100 倍違うと仮定しています。

放射線は、ヒトにガン死が増えない量に、安全係数の 100 分の 1 を掛けて年間 1 ミリシーベルトにしています。

種差はないので、余分に 10 分の 1 が掛けられています。それでも、ガン死を「健康に影響がない」と言い換えるのは無理です。

人体影響の最低線量

今のところ、頭痛が確認されている最低線量は、食品 1 kg 当たりセシウム 137 が 1.1 ベクレルなので、頭痛が出ない「最大無作用線量」は 1 ベクレル / kg になります。

人体影響の無作用線量に、安全率を考慮して決めるのが、規制の本来の姿です。

そうすれば基準が厳しくなるので、結果的に子孫に悪影響がある遺伝毒性や、発ガンへの対策にもなります。

「シーベルト」の科学的な間違い

内部被ばくを考える市民研究会 川根 真也

人体への放射線影響を、ICRP（国際放射線防護委員会）は、外部被曝と内部被曝の影響が1：1であるとして計算しています。外部被曝の延長線上に内部被曝を置いているのです。

しかし、これは科学的に間違っています。

放射性物質が体内に入ると、筋肉だったら筋肉全体に、甲状腺ならば甲状腺全体に平均的に広がるとして、放射線の影響を考えていますが、各臓器に放射性物質が均一に広がることはありません。

放射性セシウムは、かなり平均的に広がりますが、それでも均一に分布しているわけではなく、筋肉だけでなく、心臓や脳、甲状腺にも一部は蓄積します。

これまでの放射線生物学では、骨格筋にしか溜まらないというドグマがあったのです。

人間の生理的なさまざまな活動は、免疫やホルモンとの相互作用で成り立っていますが、人体影響の大きい部分に濃い濃度で放射性セシウムが分布していれば、均一として計算した結果とは、まったく異なる影響が出ます。

また、放射線が特に大きな影響を与えるのは遺伝子ですが、放射性セシウムは細胞内に均一には分布していません。遺伝子に近いところに多くあれば、遺伝子への影響は大きくなりますが、これも無視されています。

それから、心臓であれば、1%の細胞が死ねば25%の心筋が動かなくなります。このような影響の違いも無視されています。

ICRPは、こうした生物学の常識を無視して、

人間を肉のかたまりとして一律に考え、放射線の影響を平均化して計算しているのです。

都合のいい科学論文だけ使う ICRP

ICRPは原子力推進派の科学者だけで構成された民間団体です。そのため、原子力の推進に都合がいい科学論文だけを使って、放射線防護理論は組み立てられています。

そのため、幼児期で人体影響が大きくなる時期も、食べる量だけで影響を評価します。

1歳未満は臓器が未発達ですから、放射線を浴びると、大きな影響を受けますが、食べる量が少ない、という理由で、影響が大きくならないように計算結果が出ます。

8歳までは小腸、大腸などが完成する重要な時期で、免疫機構を作るために胸腺が活躍する時期でもあるので、それを破壊したり、狂わせたりすると影響は大きくなりますが、このこともICRPは無視しています。

ベクレルを、内部被曝の影響評価に使うことはできません。

そのベクレルからシーベルトへの換算は、科学的に間違っています。

したがって、シーベルトで、食品汚染の人体影響を評価した結果は、間違っています。

だから、基準に適合した低線量汚染の食品を食べているのに、ウクライナでは、痛みなどの自覚症状が出ているのです。

ウクライナで示された「痛み」の事実を基に、食品規制を根本的にやり直すべきです。

自然放射線の被曝量と大差が

放射線は、化学物質と同様に自然にも存在し、日本人の自然からの年間被曝量は2.1ミリシーベルト。

これに比べて0.011ミリシーベルトは、あまりに低い値ですが、その理由は明白です。

ベクレルからシーベルトへの換算が科学的に間違っており、食品による内部被曝を、外部被曝の人体影響と同じモデルで考えているのが主原因です。

詳細は、左ページをお読みください。

痛みが見つからなかった理由

では、どうして頭痛や足痛が、これまで見つからなかったのでしょうか。

それは、放射線を浴びても、痛みが出るまでに時間がかかるからです。

骨髄移植や臍帯血移植では、人体に致死量以上の放射線を浴びせますが、その瞬間は何も感じません。粘膜細胞などの入れ替わる期間が短い細胞が分裂をすると、そこで異常が出てくるので、異常を感じるのは数時間たってからなのです。

筋肉や神経細胞は、入れ替わるまでの期間が数カ月から1年ぐらあります。これらの細胞内にある遺伝子が放射線で傷つけられても、それが働いている遺伝子でなければ、細胞はこれまでどおりに働きます。

そして、細胞分裂するとき失敗して、多くは死に、隣の細胞が分裂して、それに置き換わります。ところが、筋肉や神経細胞では置き換わるのにも時間がかかります。

そのため、細胞死が増えると、人体は異常を感じるようになります。その感覚の一つが「痛み」です。

放射能汚染食品を食べても、頭や足に痛み

が出るまでに数カ月から1年ぐらかかるので、これまで痛みは見逃されてきました。

原子力推進派の中には、気づいている専門家がいるはずですが、痛みが起きるまでに時差がある原理は隠されてきたのです。

特に厳しくはない日本の基準は

「一般食品の基準は、アメリカは1kg当たり1200ベクレル、EUは1250ベクレルなのに、日本は100ベクレルだから厳しい基準」と言われます。

汚染食品の割合を、日本は50%、アメリカは30%、EUは10%と仮定し、安全率を考慮した結果、大きな差が出ていますが、年間1ミリシーベルトに収まるようにしているのは同じです。

年間1ミリシーベルトの被曝量では、食品汚染による内部被曝から人体を守れません。これからは1ベクレル/kgに、安全率をどのくらい掛けた食品基準にするかが課題です。

国際的に認めさせる

同時に、1ベクレル/kg規制を国際的に働きかけていくことが重要になります。

そうするには、国際的に認められる英語の学術論文を書いて発表することが条件になります。

ただ、現地はウクライナ語とロシア語ですから、その前の段階として、ウクライナの専門家と研究機関が主体になって、子どもを救いながら調査研究を進め、それを学術論文にするのがいいと私は考えます。

日本政府に、私たちの調査を確認する研究を行ってくれるように働きかけていきますが、壁は厚いので、当面は、私たちがリードしていくしかありません。

農業放射線学研究所と共同研究したい

今回、2つの学校で、放射能を少なくする食べ方について講演していただいた農業放射線学研究所のニコライ・ラーザレフ副所長は、私たちの活動に3日間付き合ってくれて、別れるときに「敬服します。脱帽しています」と言われました。

ニコライ副所長は、農業部門の代表者なので、研究で組みたいと打診しています。

化学肥料はすでに買って学校に届け始めているので、学术论文を書けるようにアンケートを作り直し、定期的に子どもの健康を

チェックしながら、土壌、作物、食事、人体のセシウム137、ストロンチウム90を測定すれば、これまで構築された被曝科学の基盤を覆す大発見の論文になります。

ウクライナの物価は日本と大差ありませんが、人件費が日本の5分の1くらいなので、日本の市民団体とウクライナの研究機関が組んで研究することは不可能ではありません。

毎回で申し訳ありませんが、子どもの健康を良くする調査研究で、研究機関と組むための資金カンパをお願い申し上げます。

食品と暮らしの安全基金 代表 小若順一

チェルノブイリと福島

「子どもの痛みをなくす調査プロジェクト」カンパのお願い

振込先：ゆうちょ銀行振替口座

口座記号番号 00160-3-512738 口座名 食品と暮らしの安全基金

(他行からは、店番：019 当座：0512738 口座名：トクヒ) ショクヒントクラシノアンゼンキケン)

※ クレジットの場合は、当団体ホームページ (<http://tabemono.info/>) からお願い致します。

感謝の言葉

タチアナ アンドロシェンコ

放射線の体への影響は、第一に痛みです。足の痛み、手の痛み、脊椎の痛み、頭痛などです。「子どもの痛みをなくす調査プロジェクト」は、すべて、子どもを助けるために行われています。

子ども本人にも体の状態を聞き、さらに医療データもあり、確実に健康が良くなっているという結果が出ています。

ウクライナを代表して、具体的なこのような支援、こういう対策を行ってくださる日本の小若さんたちに感謝しています。

もちろん、私たちは、小若さんだけでなく、子どもたちのことを心配している多くの日本人の皆さまのご支援のお蔭で、こういうプロジェクトが実施できていることを、よく理解しています。

本当にありがとうございます。何度も何度もお礼の言葉を言いたいです。

私たちが28年の間に体験した非常につらかったことは、まだ40代だった両親が亡くなったこと、近所の親戚、親友が亡くなったことです。この体験を皆さまが繰り返さないように、どうぞ、ご自分、子どもさんたちの健康を大事にしてください。



<旅程>

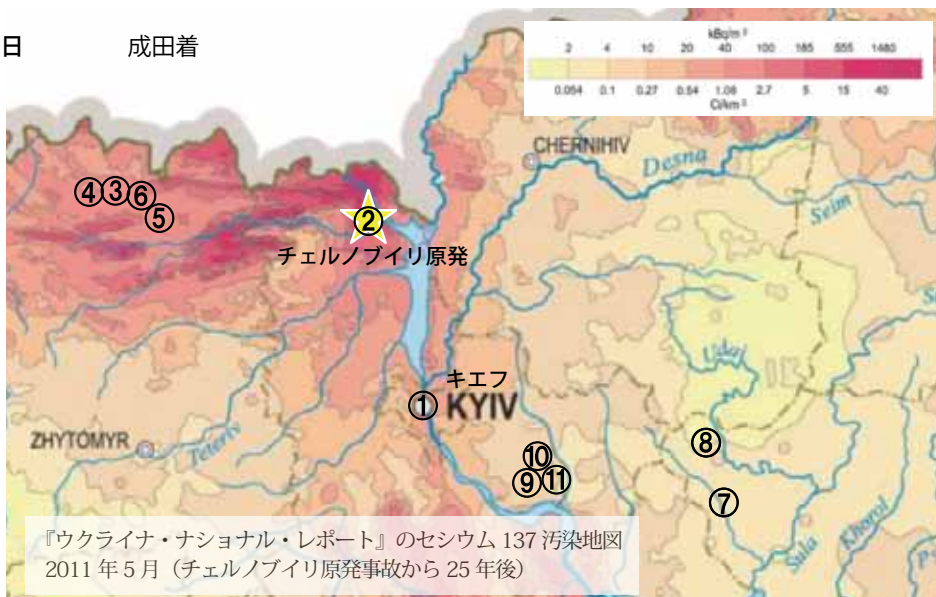
- 3月15日(土) 成田発
①キエフ着
独立広場、②チェルノブイリ原発の見学
- 3月16日(日)
土壌専門家ニコライ博士の講演を聞く
足の悪い3人の子、民間療法で治療開始
- 3月17日(月) ③モジャリ村学校訪問・聞き取り調査
④ビクニ村の議長訪問
3家族の家を訪問
- 3月18日(火) ⑤オブルチ地区行政機関所長と面会
⑥ピシャニツア村学校訪問・聞き取り調査
- 3月19日(水) ①キエフへ
ザポルーカ(ガンの子どもの家族を支援する団体)訪問
チェルノブイリ連盟マカレンコ氏講演
- 3月20日(木) ⑦オブシュキ村◎学校訪問・聞き取り調査
⑧ノヴィ・マルチノヴィツ村⑨学校訪問・聞き取り調査
- 3月21日(金) ⑨コヴァリン村家族のその後を取材
コヴァリン村学校訪問・聞き取り調査
⑩エルコフツィー村議長を訪問
- 3月22日(土) ⑨コヴァリン村家族のその後を取材-2
⑪ストヴピャギ村議長を訪問、懇親会
- 3月23日(日) ①キエフ発
- 3月24日 成田着

第5回調査団

小若 順一(団長)
丸田 輝夫(副団長)
丸田 晴江(書記)
丸田 克彦(映像)
古田 勝彦(治療)
五十嵐 進
五十嵐 英子
柏森 慶子
佐尾 和子

通訳

ヴァレンティーナモロゾヴァ
イーゴリ オコレロフ



NPO 法人「食品と暮らしの安全基金」(旧称「日本子孫基金」)

子孫を遺伝毒性のある化学物質から守ろうと 1984 年にスタートした「日本子孫基金」。

調査報道する市民団体として、ポストハーベスト農薬、環境ホルモン、ダイオキシン、抗生物質耐性菌、防虫剤などの危険性、微量ミネラルの不足によって起こる発達障害・うつ病・腰痛・冷え症・糖尿病・肌荒れなど、時代を象徴する「安全性」問題を独自の視点で切り開きながら、30 年間活動してきました。

2004 年、「食品と暮らしの安全基金」に改称し、2011 年 3 月 11 日以降は、放射能による内部被曝の重要性を発信し続けています。

情報は、月刊誌『食品と暮らしの安全』(年間購読料 10,300 円)で発信していますので、ぜひご購読いただき、最新情報をお求めください。



足が痛いという子どもたち (2012 年 6 月)



初めて出会った
足の痛い子



NPO 法人 食品と暮らしの安全基金 (旧称：日本子孫基金)

〒 338-0003 埼玉県さいたま市中央区本町東 2-14-18

☎ 048-851-1212 FAX : 048-851-1214

メール : mail@tabemono.info

ホームページ http : //tabemono.info

初版 2014.4.25

頒価：700 円 (税込) 50 冊以上は 1 冊 500 円

■送料 1～9 冊は 200 円、10 冊以上は送料無料